

舗道

宮本百合子

青空文庫

一

あつちこつちで帰り支度がはじまつた。ビルディング内の生暖かい重い空気が急にしまりなくなつて、セカセカかき立てられた。

ミサ子は紫っぽい事務服を着てタイプライタアをうつてゐる。かわり番ごとにワイシャツにチヨツキ姿の社員が手洗いに出たり入つたりした。大声で、

「ああ、ありやダメさ！」

廊下の誰かと話しながら肩でドアを押して入つて来る者もある。

ミサ子は、その中でわき目もふらずタイプライタアを打ちつづけた。もう一枚、短い手紙がある。それさえ打ちあげれば、一日の仕事はすむわけだ。

男の社員たちは、机の前にくいついている仲間に、

「おい、まだかい？」

と声をかけた。自分は洗つて來た手を拭きながら肩越しにのぞき込んだりしている。

しかし、ミサ子に、まだかい？　ときく者もいなかつたし、退け時におくれまいとして

熱心に打つて いる彼女のタイプライタアの前へ立ち止るものもない。彼女ばかりはいてもいな いでも問題にしない扱いだ。

ミサ子は馴れてる。これがこの××○○会社の氣風なんだ。入社して来るとき、タイプストは、どうか注意して余り用事以外の口を男の社員ときかないようにして下さい、と云われた。男の社員も、目立つようなことがあつてはいけませんから、その辺をどうぞ、と人事課から念を押されている。往来なんかではこれほどのことはないのだ。

急いで、やつともうあと半分というところまで打つたとき、

「ああ君、ちよつとこれをすまんが……」

モーニングを着た主任の馬島が、ミサ子のわきへ急ぎ足でやつて來た。

「すまんが、これだけやつておいてくれたまえ」

拇指の腹をなめなめ、手をとめたミサ子の顔の横で厚い洋紙の頁をしらべた。調べ終ると、ミサ子は何とも返事しないのに、

「じゃ、ここへおいとくから……」

さつさと行つてしまつた。チラリと、それを見たまんま、ミサ子は小さい椅子の上へ坐り直し力を入れてタイプライタアを打ちつけた。

女事務員だけが何ぞというとダラダラ居残りをさせられる。しかも、それを断われないような工合になつてはいる。男の社員と女の事務員との間に形式的な格の違いをつけ、事務以外の口を利いてはいけないことにしてあるのなど、なかなか会社のざるいところだ。

いつの間にか、女事務員のことについて口を出したりするのは、社員として見つともいいことじやないという気風がしみ込んでいる。どの部だつて女事務員は一人か二人しかいないから、どうしても損な役割を押しつけられてしまうのだ——。

四時半になるのを待ちかねてドタドタみんなが帰つてしまつた。埃っぽい、机のつまつた室内を照して天井の電燈がついた。

ミサ子は、洗面所へ行つた。ふんだんに水をつかつてゆつくり手を洗つたり、髪をかきあげたりしたら、少し気分がさっぱりした。居のこりときまつたら、いそいだつてつまらなかつた。××〇〇会社は四時半から後の残業は七時以後からでなければ割増しがつかなかつた。従つて、ちよいちよい居残りさせられても大抵のときはタダで、使われる者の損になるばかりだ。

自動車の警笛。メガホーンで何か叫んでいるぼやけた人間の声。丸の内のアスファルト道路から撥ねかえる夕方の騒音が、人気ない室へつたわつて来る。

ミサ子は左手を握つて暫く右の肩をたたいてから、再びタイプライタアをうちはじめた。給仕の牧田が茶碗をあつめにやつて來た。

「おや、いたんですか！」

「……あつちに誰かのこつてる？」

「柳さんがいますヨ」

給仕が出て行つて暫く経つと、キチンとしまつていないドアを少しあけて誰かが覗いた。ミサ子がわざと知らん顔をしていると、今度は全体ドアをあけ、庶務の沖本がのつそり入つて來た。

「……御精が出来ますな……ひとりですか？」

じろじろミサ子のまわりや誰もいないたくさんの机の方を見まわした。警部あがりの沖本を好いてる者は一人もいなかつた。「穴銭」という綽名がついている。頭に穴銭みたいなハゲが一つあつた。警部をしていた時分、強盗にかみつかれた跡だという話だが、女事務員たちは、

「うそ！ きっと神さんにやられたんだわよ」と嫌悪をこめて笑つた。

神さんにだつて喰いつかれそうに憎々しい五十男だ。

「あんた、一昨日だつたかも随分おそかつたじやないか……うん？」
ミサ子はむつとして、

「これ見て下さい」

おつけられた支店長宛の書類を眼でさした。

「四時半になつてこれだけ出たんです……こんなに使われて病氣んでもなつたらどうして
くれるんでしょ？」

「ハハハハ……そんなこと会社の知つたことじやないヨ。ハハハハ」

金でワクをはめた前歯を出して意地わるく笑いながら沖本は出て行つた。

軽い靴音をたてて柳がやつて來た。

「どのくらいですか？」

「さあ……もう一時間……そつちは？」

「八時までにどうしてもやつちやうわ。一緒に何かたべて帰らない？ 帰つてから火なん
ぞおこしていられないもん」

「私なんか、もういい加減ペコペコだわ」

夜の八時すぎて、庶務へ残業届けを出しミサ子と柳とはやつと宏莊な××ビルディングを出た。

「いやな奴、あの穴銭！自分で来て見てる癖に、課から部から、姓名まで云わせるんだもの！」

「そういう奴なのよ。こつちからわざわざ届けなけりや見ていたつてつけないで置くんだから」

それから「モーリ」へ行つてミサ子は支那ソバを、柳はカレーライスをたべた。

二

市ヶ谷で省線を降りると、ミサ子はガソリン店の角を、牛込の方へ登つて行つた。

一番姉の文子が三人の子持ちになつて細工町に住んでいる。急に相談したいことがあると、速達が来たのだ。

琴曲教授の看板について石敷の小路を入り、立てつけの悪い門をあけ格子をガタガタやつていると、真暗な玄関へサツと茶の間からの灯がさした。

「だアれ？」

「小母ちゃんよ」

「母さん！ 小母ちゃんが来たヨ」

九つの順三の声がした。

「マア、おそいのね、今かえり？」

割烹 前掛けで手を拭きながら、文子が台所から出て来て格子の懸金をはずした。

「さあ、どうぞ」

文子が長火鉢の前へ坐ると、九つに五つに三つという子供たちがぞろりと母親にたかつて、凝じつとミサ子の方を眺めた。

「どうしたの、順三、小母さんにこんにちはしたの？」

順三は、体をくんねり母親にもたらして笑つてばかりいる。

「義兄さんは？」ミサ子が訊いた。

「お風呂から床屋へまわつてゐ筈よ……直き帰るわ」

「お変りなし？」

「相変らず——お友達やなんかにも頼んであるらしいんだけれど、義兄さんのようなのは

却つて駄目ね。ズブの学校出ならこれでまた、就職口があるらしいんだけれど……」

太田は高商出で、十年余××物産に勤めていた。始めは池内成三」という××の大番頭のひきで将来見込みのありそうな鉱山部詰めだつた。それがだんだん中軸から遠いところへと勤務を移され、昨年の秋不況と一緒にとうとうくびになつた。

太田の亡父が知事で、二三軒の小さい貸家と今住んでいる地所家屋をのこして行つた。それで、どうやらやつている訳だ。

文子は、

「私この頃つくづくミサちゃんが羨しいわ」

と、しんかららしく云つた。

「せめてお小遣いでも自分の力でとれたらどんなにいいでしようね」

わきに遊んでる子供たちに聞えないようにしながら文子は小声で、

「先月家賃のとれたのはたつた一軒よ。お話にも何になりやしない！」

ミサ子は長火鉢の灰をかきながら、姉夫婦の生活に同情と歯痒さとを感じた。結婚当時は、僅かながら不動産もあるし、勤め先もいいしと楽観していたのだろう。けれど、世の中は決して一つところに止つてはいないのだ。

「」ないだちよつとわけがあつて価格評価をして貰つて、私、全く先々どうなるんだろうと思つたわ。地面や家作なんてもう何の頼りにもなりやしない。価ねじやないのね」

姉の相談は、ミサ子に同居してくれないかと云うのだつた。

「恥かしいこつたけれど、全く法がえしがつかないの。だからミサちゃんの都合さえよかつたら、よそを肥やすより、うちをすけて貰えまいかしらと思つて——」

ミサ子が急場の返事に困つて黙つ正在と、

「図々しすぎる？」

文子は微かすかに顔を赧らめながら極りわるそうに笑つた。

「そんなこと決してないわよ。……でも義兄さん承知なの？」

「承知するもしないもないじやありませんか——。ミサちゃんだつて樂じやないでしよう？ 自炊なんて簡単なようで面倒くさいもの……家にいりや台所へ立たせるようなことはしなくてよ」

ミサ子が××○○会社からとつてある月給は英文、邦文両方やつて三十八円だつた。そこから天引食券代五円、クラブ費親睦費とさしひかれる。間代を十円払うと、あと食べてエスペラントの月謝を出し、たまに映画でも見るのがやつとだつた。

何時になつても家へさえかえれば、炊いた御飯があるというだけでも、のんきになれる。

だが――

「どうしようかしら……」

ミサ子は首を振り振り返事に迷つた。実のところ、ミサ子は姉夫婦のやつてるような暮しの中へ引ずり込まれるのが厭だつた。

ハツキリ返事しないでいるうちに、

「ヤア」

と、太田がドテラに羽織という姿で帰つて來た。

濃い眉と眉との間をテラテラ光らせ、剃りたての顎、長めな鼻の下へ小さく鬚を立ててゐる。ミサ子が知つてゐる限りの太田は、いつも同じ片づいた表情で、

「――どうですか？　この頃は」

と長火鉢の前へ座つた。

「相変らず……」

「どうだね、一つミサ子さんの会社へでも雇つて貰えまいかね」

嘘とも本当とも分らない表情でそう云いながら太田は朝日に火をつけた。

「私みたいなへボからじやだめよ」

「いくらでもいいよ。ほんとに！ そう云つてみんなに頼むんだが、これでいざとなると
そもそも行かないものと見えてなかなかないね」

一種の自負ありげに云うのがミサ子には気の毒だつた。

「……二年は辛いわね、でも……」

「ああ。しかし、いろんな事業はやつていますよ。ボール・ベアリング、鉄の円い玉だが、
カフス・ボタンやいろんなものにつかつて銀ぐらいねうちのあるもの、あれの製造工場を
やつっているし……」

「儲かります？」

わきで紅茶をいれながら文子が、

「それどころじやないのヨ！」

やりきれないという目顔をして見せた。

「今のところは、とてもそこまでは行きませんな。何しろ得意がああいうものはきまつて
いるから、そこへ割込むのが大変だ」

ミサ子は、太田が十年余も大ブルジョア企業の中に働いていたのにまだそんなことを考

えてるのかと不思議な気がした。ミサ子の浅い知識で理解したつて今の不況は生産がなくて不況なんじやない。在りあまつて市場がないから不況なのだ。

「小資本じゃ駄目なんでしょう？」

「駄目だね。……だがこんどは一つトーキー映画会社をやりますよ、資本百五十万円の。——これは確にいいね！」

パラマウンントが、天然色写真で同時にトーキーの何とかという最新撮影機を、元同じ×物産で今は蓄音器会社に関係のある友人へ特別契約でよこした。日本で、天然色トーキー映画フィルムをつくる。それが世界へ出て儲けは確実だというのだ。

余り話が簡単なんでミサ子は思わず……

「……だつて、俳優を見つけたりするの大変でしょう？ そつちはどうなるの？」と訊いた。

「ナニ、そんなことはどうでもなる」

「だつて……スターを引っこぬくのに大した金でしょう？ それにいい監督だつて買つて来なくちゃならないし……」

「いや、それは何とかなります。十万円もする機械が何しろタダ手に入るんだから……」

ミサ子は義兄の云うこときいているうちに鳩尾みずおちの辺がつめたくなるように感じた。

才能のない、どこか足りなくはないかとさえ思われる太田は、失業で焦れば焦るほど××が巨大な資本の力で、儲けるのを見て来た癖で可能性のない儲妄想にかかっている。

「——義兄さん、退社手当随分どつさりおもらいんなつたでしよう？ みんな事業へつぎ込み？」

すると、太田の無表情な剃あとの青い顔に何とも云えない頑固な氣色が浮んだ。

「——実はそのことじやあ僕清水を怨んでるんです」

清水とは太田の従兄で、ボール・ベアリングの共同投資人なのだ。

ミサ子の驚いたことには、こういう話の間姉の文子がまるで無頓着なことだ。長火鉢のわきに縫い直しものをひろげながら、夫と妹とを勝手に話させ、自分は仲間に入つて来ようとも、理解しようともしない。

何も彼もウヤムヤで、ミサ子は十一時頃帰りかけた。姉が男下駄をつっかけて門をしめかたがたついて來た。

「じゃ、さつきの話、考えといて下さいね」

「考え方。……でも、姉さん」ミサ子は、我知らず姉の手を押えるようにして云つた。

「本当に義兄さんには気をつけなくちゃ駄目よ！ あんなインチキ事業ばっかり追つかけてたら、それこそ今にドタン場だわよ」

文子はどこまでも受けみに手をとられたまま心配そうに、だが矢張りことの本質はちつとも分つていな風で弱々しく答えた。

「私だつてそりや気が氣じやないんだけれどねエ……」

三一

主任の机はがら空きで、やつて来ている連中も、執務姿にはなつてゐるが或る者は廻転椅子をテーブルとは逆な方へ向けて新聞をひろげている。

私用らしい手紙を書いている者もある。

ミサ子は、タイプライタの仕度をしておいて、膝の上へ婦人雑誌をひろげ読んでいた。柳が発起して××○○会社に働いてる女事務員の一部が雑誌購読会をもつていた。一冊分の会費を払えば順ぐりいろんな雑誌がよめるのでみんなによろこばれている。

不図^{ふと}ミサ子は思い出した。××商事につとめている順子と左翼劇場へ行く日をうち合わ

せるのは今日の約束だつた。

ミサ子はエレベエタアで地階まで降り、電話で順子を呼び出した。

「もしもし、今どう？」

「直ぐならいいわ、いらつしやいよ」

疾走する自動車が都会の風をまき起す。ミサ子は翻える膾脂色えんじの裾を押え、ひろい、街路樹の植わつた東京駅前の通りをつつきつた。

すぐ前の舗道に沿つて並んでいる幾台もの自動車のボディーはキラキラ日に照つているが、××商事の豪壮な石造の入口の奥は暗くひんやりして見える。

何段もの石段を小走りに登つて、ミサ子は詰襟の受付に順子への面会を求めた。

左手に長い廊下がつづいている。そこに、後から光線をあびて順子の姿が黒く現れた。下を向いて何か紙片れのようなものを見ながらゆっくりやつて来る。

ミサ子は執務時間中に来ているのだ。気がせく。

「ちよつと！」

声を殺してせいたが、勿論順子には聞えない。紙片れを事務服のポケットへしまつたのを見すましてミサ子は、両手をゲンコにし、ランニングの恰好を真似して体の前で動かし

て見せた。順子は、遠くから首を曲げ、

「なあに？」

という思い入れだ。早くつたら！ のんきね。ミサ子がもう一遍袂を振つてランニングの身ぶりをし、おいでおいでをゲンコのまんまの手でしたときだ。いきなり、

「おい！ 何してる、そこで！」

びっくりしてミサ子が振向くと、立っているのは、縞のネクタイをつけた背広の男だ。
「え？ 何してるんだ、ここで！」

ミサ子は凝つとその男を睨み、それから守衛の方を見た。変な、何か悪ふざけをしかける男かと思ったのだ。が、守衛は、金モールで××商事のマークを縫つた詰襟の上から、
冷淡な軽蔑した口元をしてミサ子を見下している。――

ミサ子には訳がわからない。

「――私何かわるいことをしたんですか？」

「何か悪いこと？ 人を小馬鹿にしたこと云うもんじゃない！ う？ 大体何と心得てるんだ。この頃の女どもと来たら変な洋服で一日じゅうとび廻るかと思いや、ふざけた恰好して……さ、名と部を書け。あとで厳重に処分するから」

受付へミサ子はさつさと歩いて行つた。縞ネクタイの男は、片手をズボンのポケットへ突込んだまま、顎をしゃくつて、「おい、この女に紙と鉛筆をやる」と云つた。

「さ、書くんだ。正直に書くんだぞ」

ミサ子は口惜しさから人さし指の爪が白くなる程力を入れて鉛筆を握り、紙一杯に大きい字で××○○会社△△部大井田ミサ子と書いた。

ミサ子がこつちを向いて書いてる間、縞ネクタイは足を開いて立ちぼんやり玄関前の舗道を眺めていた。

書き終つたと分ると、

「どれ、こつちへよこした！」

と、皮の厚い手をのばした。横面に平手うちをくらわせるような氣持でミサ子はさつと紙をつきつけた。

縞ネクタイは、読み下すなり、あわてて片方の手をポケットから引き出した。

「なんだ！」

守衛と小柄なミサ子とを急しく見くらべた。

「うちのもんじやないじやないか」

肌理きめのあらい縞ネクタイの顔が何とも云えず赤くなり、彼は紙をもつたまんま一三歩そ
の辺を動いた。

「どうして応接間へ御案内しなかつたんだ！」

順子が、やつと今になつて涎のたまつたような声で云つた。

「——私のところへ面会にいらしたんですね」

「いや、実にどうも！ あなたも一言おつしやつて下さればよかつたんだが……どうも失
礼しました」

守衛に、

「御案内して！」

と云つた。

「いいんです」

そこに立つたまま、ミサ子は言葉短く順子に、

「いつがいい？」

と訊いた。順子は顔をいきなり逆撫でされたような表情のまま、「あさつてで私はいいけど」二人が話している間に、縞ネクタイはどうかへ行つてしまつた。

「誰？　あいつ」

「大沢つての、庶務よ」

「——じゃあさつてね」

「ええ」

ミサ子は××商事の壮大な玄関を一段ずつ降りるとき、憤怒でまだ脚が震えるのを感じた。

四

胸糞がわるいとしか云いようのない心持だ。昼、地下室の食堂へ女事務員があつまつたとき、ミサ子は今朝の経験を話した。

「ひどいわねエ、ひとを何だと思つてるんでしよう！」

「××商事の大沢つてば有名なのよ」

「一体、大会社の庶務だの守衛だのつて、きっと巡查上りだとか刑事上りよ。馬鹿にしてるわ！」

一つむこうのテーブルでは給仕達が夢中になつてラグビーの話をしながら飯をかつこんでいる。こっちのテーブルで、女事務員たちはめいめいの粗末な膳の上から首をつき出すごとにし、一人一人そのとき口を利いてる仲間の顔を見ながら熱心に喋つた。

××○○会社と云えば日本で指折りの大会社だが、その丸の内を圧すように聳え立つ建物で働いている人間の中には、はたに知られない不満がある。

××○○会社の二十人近い女事務員はみんな少くとも女学校出だつた。柳、ミサ子、その他三四人は専攻科や専門学校出だ。男の社員の場合は中学校出と専門学校出との間には区別があるので、女事務員だけはそんな区別がなく十束一からげだつた。

女事務員は決して正社員にはなれない。どんなに永く勤めた揚句でも、女事務員に退職手当をくれるという規則は会社につくられていない。

会社の都合のいいときはいろいろおだて、実際には「女ども」と軽蔑されるのが、みんなの共通な絶間ないフンガイの種であつた。

女学校出の若い女たちらしく互の中だけで、

「何て馬鹿にしてるんでしょう！」

「人格を無視してるわよ！」

などと不平がよく洩らされた。

然し、××○○会社には職業紹介所などから人を入れない不文律が昔からあつて、多勢いる女事務員たちも、みんな誰かの紹介で入社した者ばかりだ。

生活も親や兄の家にいて安定のある者の方が多かつた。だから、会社の中でいろいろフンガイし、馬鹿にしてるわ！ 何て癪なんでしょう！ と云つても、その場その場、とりとめない亢奮で消えてしまうのが癖だ。

今もガヤガヤ喋つているうちにだんだんみんなの気分の張りがゆるくなつて、

「——あなた、それウォータア・カールなの？」

「そうじやないわ。あれ毎日やらなくちゃ駄目なんでしょう？」

そんな会話がポツポツ出はじめた。

ミサ子はテーブルの上へ頬杖をつき、こぼれた番茶のしづくを妻楊子で拡げながら、考えこんでいた。ただ喋つただけでは消えない腹立ちのかたまりがミサ子の胸にある。

××商事の奴が、若し本心から怒つてミサ子にくつてかかりでもしたのなら後がもつとさつぱりしただろう。××商事の奴のしんはガラン洞の気持だつたのだ。それは、受付でミサ子が自分の名を紙に書いてた間、ぼーっと往来を眺めていた男の顔付でわかる。

あいつは、自分のものでない何かの威を借り、高飛車に出たのだ。だからミサ子が他の会社のものだと分つたときのみつともない、卑屈なあわてざまときたら、どうだ。全く「ざま見ろ！」だ。

然し、ミサ子の苦々しい発見は、そこからも深まつた。あんなケチな奴にさえ権力のようなものが与えられている限り、現に順子はたまげてしまつて、きくべき口さえ碌にきけなかつたではないか。

今までミサ子はみんな、ほかの女事務員と同じように守衛などというものは謂わば自分達のためにもなる番人ぐらいに考えていた。それも違つていた。ときによれば守衛までハツキリむこうに廻るのだ。そのために雇われているのだ。

考へているうちに、ミサ子は切ない緊張した心持になつて來た。頭の中で、何かカラクリがじりじりと一まわりしかけている。これまでうつかり見そくなつていた自分たち女事務員、勤人の生活の本体というものがわかつて來そうな工合だ。

ミサ子は、思いが凝つて上氣のぼせ、少し恰好のかわつた奇麗な一重瞼をあげて、何ということなく、たべあらした膳ごしにテーブルのむこう端にいる柳の方を見た。

柳はいつものふつくら落着いた顔つきで、余り喋らずおだやかにミサ子を見ている。が、ミサ子はその眼差しから今は特別自分の心持に相触れる何かを感じた。

やがて、柳が、

「みなさん、どうオ」

と、持ち前のゆつくりした口調で云いながら椅子をどけて立ち上った。

「お天気がいいから、また四十分ピクニックやらないこと？」

「賛成！」

「私丸菱へ行かなくっちゃ」

ミサ子を入れて十人ばかりが、柳のゆれている濠端へ出て、初秋の日向を日比谷公園の方へ歩いて行つた。昼休みが一時間ある。四十分ピクニックもいつとはなしはじまつて、一月に二度ぐらい、日比谷公園の池の畔へ出かけたり、芝生で休んで来たりするのだ。

狭いコンクリートの階段を三階までのぼつて行くと右側に小さい借室が四つ五つ並んでいる。廊下に雑巾バケツや脚立きやたつが出しつぱなしになつてゐるという粗末なビルディングだ。

エスペラントの講習会はそこの一室である。

ミサ子が富士絹の風呂敷づつみを抱え、ソッとドアを開けて入つて行くと、荒板を打ちつけて拵えたベンチにかたまつて板をしわらせながらかけている連中の中から菅が、

「ヤア……ちようどいいところだ、早く来なさい。みんな食つちまうヨ！」

と大きな晴ればれした声で呼びかけた。

エスペラント講習会には實にいろんな連中がやつて來ていた。七八人いる女の中にも、女教師らしい洋装のひともいれば、役所づとめらしい地味な袴姿の三十前後のひともいた。男の方はもつと雑多で、若い勤人、労働者風のものから給仕らしい十六七の少年までをこめている。

めいめいの身分については互に余り喋らなかつたが、ミサ子はこの講習会の雰囲気がいかにも親しめた。

講習がはじまるとき、中尾という黒い服を着た独身者らしい中年の講師が、

「この中で英語や何か、外国语を一つもやつたことのない人がキットあると思うんですが
ちよつと手をあげてくれませんか」

と云つた。そのとき菅は茶色のシャツを着た腕を最初にあげて四辺あたりを見廻した一人だ。

それからだんだん講習がすすんで何日目かに、

「君は労働者か?」 「そうだ。君も労働者か? どこに働いているのか?」 「金属工場に
働いている」

という問答が出て來たことがあつた。すると菅が、

「アノー、菓子工場つて云うのはエスペラントで何ていうんですか」

ときいた。みんなは何ということなし、素直な菅の質問に好意を感じて笑つた。菅は自分が菓子工場に働いていることをみんなに隠さないばかりか、ときどきハトロン紙の大袋に一杯パン菓子を抱えこんで来て、みんなに振舞つた。

今夜も、カサのない電燈の下にかたまつてゐる中心は、菅のもつて來た菓子だ。

「食べろよ、同志!」

とあやうげなエスペラントで、しかもそう云えるのがいかにも満足そうに云いながら菅が

席をつめてミサ子を自分のとなりにかけさせた。

「ええ、ありがとう」

ミサ子は、むこう側に坂田がいるのを見つけて、軽く目礼した。ずっと講習会の始まりから来ている。ついこの頃柳の従兄で内務省に勤めていることがわかつた実直そうな青年だ。

勤めがえりが多いから、パン菓子はいつもみんなに歓迎される。

「これで番茶が一杯あつたら申し分なしだのにね」

ミサ子のために席をゆずりながら、別に挨拶もしなかつた三輪みどりが、紅を濃くぬつた唇から煙草の煙をフツとふいて云つた。

「菅さん、親切ついでにヤカンもこの次もつて来てよウ」

「丸ビルにや、ヤカンなんぞいくらだつてあるんだろう。一つかつぱらつて来なヨ」

「——御冗談でしよう！」

長めな断髪にコテをあてて耳のまわりへ捲きあげ、みどりは、黄色い薔薇のような半衿に、派手な銘仙の着物を着ている。和服でも高く脚を組み、女同士より却つて男の連中と氣安げによく喋つた。そういう点が講習生の中でも目立ち、女事務員と云つても、ミサ子

たちの氣風とはガラリとちがう。

菅は、だれをも分けへだてしない口調で昨夜近所のラシャ屋へ入つた強盗の話をした。
「店の若いもんに追つかれられて、ものの十町と逃げないうちに、とつつかまちまいやが
つた。そいつたら、懷へデツかい自動車のラッパをもつていましたヨ」

「——何です？ そのラッパは、ぬすんだんですか？」

「そいつはね、入ろうと思う家の前でそいつをブーブーやって『今晚は！ 今晚は！』と
やつたんです」

詰襟服を着た少年の尾野が、

「この頃は犬の鳴声の素敵に上手い奴もいるつてネ^{うま}」

そう云いながら、パン菓子へ手をのばし、一どきに三つ四つ掌へ握りとつて食べている。

最後にドアがあいて、

「今 日 は」
ボーナン・ターゴン

肩のガツチリした中尾が入つて來た。いつも通り、ゆつくりした動作でステッキをビラ
の下つている壁の隅にたてかけ、ポケットから水色の薄い教科書を出しながら、

「——なかなか御馳走ですナ」

笑つて教壇がわりの大机の前へ行つた。

立ち上つて机から菓子屑をはらつていた菅が、

「失礼ですが、アノー、ここにとつときましたから」

と、わざわざ菓子の包みを挙げて見せたので、みんな笑つた。

今日は第六課だ。

「君の工場主はどんな人間か?」

「大ブルジョアだ。彼は赤い面をしている。然し赤い思想は大嫌いだ」

という文句が、クツキリ太い活字で教科書の中へ出て来たとき、ミサ子を入れて三十人ばかりの講習生は粗末な室の中で愉快そうにドッと笑い出し、窓の下を通つている江戸川行電車の響を一時消した。

六

「真直まっすぐ おかえりですか?」

「ええ」

エスペラントがすむとミサ子と坂田とは偶然並んで九段ビルを出た。まだ十時前で、散歩する人通りとレコードのジャズの響が歩道にあふれている。

チカチカ眼をさす店頭の灯をはなれて天を見ると、小さく澄んだ月があつた。そう気がついて見ると広いアスファルト車道のところは、どこか蒼んだ月の光がおびただしい街燈の輝きの底に閃めいている。

ミサ子は、フエルト草履で歩きながら、

「柳さんにこの頃ちよいちよいお会いになりますか」

と坂田にきいた。

「ええ会います」

それから、笑いを含んで、

「こないだは××商事でえらい目にあわれたそうですね」

優しく顔を見られて、ミサ子はちよつとてれた。

「——ええ。……でも私あとから考えてもう一つ口惜しいことがふえたんです」

「どういうことです?」

「だつてね、××商事の大沢が私をドナリつけたときね、私思わず知らず『私何かわるいことをしたんですか』って云つちやつたんですの。どうして『あなたが私をドナル権利はないでしよう！』って云つてやらなかつたかと思うわ』

「ハハハハ……でも大分みんなほかの女事務員のひと達もフンガイしたそうじやないですか」

「ええ——でも駄目です。一日もたつとみんな忘れてしまつてるらしいんですもの」

「——ひとつ、そんな会社、やめてやつたらどうです？」

坂田のおとなしそうな風采や地道そうな様子に似合わない云いかたなので、冗談か本気か見当がつかず、ミサ子は思わずチラリと対手の青年らしい横顔を見た。それから、

「そんなこと出来ないわ」

と短かく云つた。ミサ子の実家はもう母親一人で、それが千葉の兄の家に厄介になつているのだ。

それに、これはまだ誰にも云わないことだが、ミサ子はこの頃自分の勤めに、何かこれまでと違つた気持を感じ始めているのだ。

そのまんま、黙りこんで暫く歩いて行くと、誰かが後から軽くミサ子の袂にさわつた。

ふりむくと同時に、

「——一緒に行かない?」

紅の濃い黄色い半襟のみどりだ。ミサ子の返事も待たずスッと並んで歩き出しながら、「あなたたち、どつち?」

「すぐそこから省線へのるのよ」

「あなたも?」

ミサ子の顔を追いぬくように自分の化粧した顔を坂田の方へ出して訊いた。

「僕は本郷の方です」

「じゃちよつとそこいらでお茶のんで行かないこと? ね」

「さあ……」

みどりの装^{なり}がいやに人目につく。その上そんな金もないのにミサ子は二の足をふんだ。
「私おごるから……ね、いいじゃないの」

二人の女の押問答には仲間いりをしないで歩いていた坂田が、神保町の角へ来ると、「じゃ……失敬しますから——」

丁寧に帽子へ手をかけ、電車のり場の方へ行つてしまつた。じや私も帰ろうと云うかと

思うと、反対にみどりは、

「さ、二人つきりで私却つてうれしいわ！ 急にこんなこと云つて、あなた妙に思うかも
しれないけど、私淋しいのよ。だから、つきあつて——ね？」

三省堂の喫茶部へ入つた。ミサ子は紅茶を、みどりは伏目になつてソーダ水をのんでいたが、

「こんな話をするの今日ははじめてね、あなた、私をどんな女だと思う？」

落ついてさし向いになつて見ると、ざつくばらんな、いじらしいところを感じ、ミサ子は、

「私なんかあなたなんぞのお歯に合わないと思つてたわ」と正直に云つた。

「そうオ？」

ソーダ水をストローでかきまわしながら、やつぱり伏目のまんま、

「私は違うわ、あなたはわりあいお高くとまつてないから、初めつからすきだつたわ」

「…………」

「ね、大井田さん」

耳のまわりの捲毛をふるように頭をあげ、

「あなた、勤め辛くない？」

喰い入るような黒い眼でみどりはミサ子を見つめた。

「そりやとても癪なときがあるわ」

だが、みどりの眼には、そんなミサ子の言葉以上の切ないものがある。我知らずつり込まれて、

「あなたの方も、えらい？」

「違うわ！ そりアちがうわ。あなたのはとにかく大会社だけれど私のは個人経営だし⋮⋮丸ビルの中なんて、トツテモひどいワ」

みどりは秋田から逃げて上京して來た。英文タイプも出来るのだが、そんなわけで東京市内にちやんとした紹介者と保証人がないから、ミサ子のいる××○○会社のようなどころではどんなにしても雇つてはくれない。試験も、保証人もいらない個人経営の事務所の女事務員に職業紹介所から雇われるしかないのだ。

「顔だけみてすぐ雇うのヨ、そういうところじや。大抵一部屋だけ事務所に借りていて、隣りはもうよそだから、図々しいもんだわ。⋯⋯始つからそれを予算に入れて何したつて

尻をもちこみようのない、保証人なんかなしの若い女をよろこんでつかうんです」

「仕事のほかのサービスまでやらさられるの？」

「……私たちの辛いのはそれだわ！」

クサクサすることがあるらしいみどりの素振りのわけがわかつた。ミサ子たち××○○会社の女事務員が腹を立てるのは、またそれとは違つた。男の社員と女事務員とを昔風に区別し、男の社員と女事務員との間に恋愛問題でもおこると、クビになるのは大抵男の社員ではない。女事務員だけを懲罰的にクビにする。そんな片手落ちのことがあるものかと、よくみんなの問題になるのだ。

「……女事務員と云つたって、経営でいろいろ辛さもちがうんだわねえ」

ミサ子はしみじみした心持になつて云つた。

「でも、どつちみち損なのはお互様に女だわ」

「——大経営のところでは辛いつたつて仕事の上だけでしょう。特等席だわ。……お話しんならない意地のわるいことをするわよ。室んなか両手をコウひろげて追いまわして来てさ」

みどりは仕方をして見せながら真面目な、殆ど腹を立てた少女みたいな口ぶりで云つた。

「いつまでもひつぱずしてゐるところへ人でも来ようものなら、一旦通した十枚ぐらいの書類を『オイ！　こりや何だ！』つて、一字ばっかりの誤字で、ビリビリ目の前で裂いて見せるわ」

「……あなた仲よしつてないの？」

ミサ子はみどりが氣の毒になつてきいた。

「学校が東京じやなかつたし……私たちみたいなのは駄目よ。事務所でだつていつも独りぼつちだし……なお弱い立場なのね」

見栄のないみどりの話をきいているうちに、自然とミサ子の頭の中に××○○会社の女事務員たちがもつてゐる一つの氣風みたいなものが思い浮んで来た。

昼休みに、××○○会社の女事務員が三四人ぐらい連れだつて丸の内を散歩している。そんなとき、いかにも鮮やかにモダーンな洋装の女事務員や、派手な、例えばみどりみたいな服装をした女事務員たちが、やっぱり休みでブラブラその辺を歩いているのに出会うことがある。

どつちかというと落付いた風采をしている××○○会社の事務員たちはよくよくのときでなければ、決してそういう丸ビル、海上ビルなどの女事務員たちの服装をふりかえつて

見たり、その場で話題にのぼせたりすることはしなかつた。すれ違いながら云わざ語らずのうちに、ああ云うひと達と自分たちとは違うという女らしい自惚うぬぼれがみんなの心の内にあるのだつた。××○○会社が女事務員の断髪を禁じたり、洋装をするといやな顔をすることには誰しも不満なのだが、それは内輪のことで、いざ他のもつと小規模のところで派手な装をしてひどい働きをさせられている女事務員たちとつき合わされると、反撥して不満を忘れ、自分たちは××○○の者だと澄してしまうのだ。

「モーリ」で十銭の支那ソバを食べようとも××○○会社へ勤めていると云うと、そのきこえで現に間借りをするとき、小母さんの信用ぶりが違つた。そういうバカらしい雇われ人の見栄みたいなものにつられて、××○○会社の女事務員たちが、変にツンと自分たちだけでかたまろうとするのだ。そしてまたその方が会社にとつては便利で安全だ。――

みどりはフト話題をかえ、

「大井田さん、いつも勉強して来るわね」

と云つた。そして今はみつ豆のかんてんをぱちぱちたべながら、

「……私工スペラントなんて柄じやないんだけれど……でも、講習会へ来てるひと、わりかたみんな気持いい人ばっかりね。それに教科書が痛快だわ。……いつそあのパン菓子屋

さんのお神さんにでもして貰つちやおうかしら」

みどりは元柳原の裏のアパートをかりて住んでいるのだつた。

「気が向いたらよつて下さいな。とてもおかしなところで笑つちやうワ。どうせ昼間は家にいなかから、盲窓みたいな三角の室にいるの……七円よ、悪くないでしょ？」

ミサ子は、みどりに対するこれまでの自分の心の中にもいつの間にかやつぱり××○○流の気分が入つてたと思つて、後めたい心持だつた。

「——丸ビルの事務所へよつてもかまわないかしら」

「かまうもんですか！ でもあすこだつていつまでいれるか知れたもんじやないわ」

「かわるの？」

「だつて、ウダウダ云うの聞かなけりやクビだもの。——まあ大抵一つところ三月だわね」
ミサ子も自分の住所と略図とを書いてわたした。

テーブルから立ちしなに、みどりは着物の襟元をひっぱりながら（彼女の方を三人づれの学生がじつと見ているのにかまわず）、

「……ああア、また草履も買わなくちやならないし」

と、泥水がしみてきたなくなつた藤色の草履を眺めて云つた。

「鼻緒なんか、でも新しいようじやないの」

「ええ、本当なら買つてまだいくらもたちやしないのよ。こないだおひるつからひどく雨が降つたときがあつたでしょ。私がちよいとツンツンしたつて、あの雨ん中をわざと傘がないのに集金にやらされたんだもの……たまりやしない。——」

神田駅で別れて省線にゆられながら、ミサ子はみどりの口紅のあと残つたストローの色を目にうかべた。

今夜の話で、然しミサ子たち××○会社の女事務員がブツブツ云いながら結局納まつていろいろのわけがハツキリしたように思えた。

××○会社には女事務員でも、支店からまわつて来たりしてかれこれ七八年勤めている人が一人二人いた。この不景気でもクビきりをやたらされないと安心が、ひとつは××○会社の女事務員たちを引込思案にさせている原因だ。

七

その日は朝つからまるでいそがしかつた。やつと暇を見てミサ子が洗面所へ行こうとす

ると、むこうから靴音を立てて庶務の沖本がセカセカ小使とやつて來た。

「どうしたんだね、佐田君がぶつたおれたつていうじゃないか」

「アラ！」

ミサ子はびっくりした。

「ほんとですか」

「仕様がないよ。だから御婦人は……」

小走りにミサ子が沖本と洗面所へ行つて見ると、ほんとだ。白いタイル張の床へじかに事務服を着たまんまの佐田はる子が倒れて、掃除掛の手拭を姉さんかぶりにした小母さんが、ヤツと七三に結つたはる子の頭だけ黒綿襦袢の仕事着をきた自分の膝へ支えている。

「あら、あら、心配だワ、ちよいと！　はる子さん！　さ、のんで！　これを飲んで！」

きたないのをわすれ、自分も床へ膝をついた岡本しづ子が真蒼になつてコップについてだ水を何とかしてのまそそうとしているところだ。

三人ばかりの男の社員がかたまつてそれを見ていた。

「それじや駄目だよ。歯をくいしばつてるもん」

しづ子が、

「はる子さん！　はる子さん！」

おろおろして氣を失っている対手の帯の辺をゆすつた。

「——口うつしがいいんだがね工」

小母さんが云つた。

「おい、平田！　どうだ一つ！」

「ばか、人工呼吸すれば、脳貧血ぐらいすぐだヨ」

云うばっかりで誰も實際には手を出さないところへ、

「一体、どうしたんだ」

沖本がかがみこんだ。

「へ、あたしがね、ここんところを拭いていると佐田さんがはばかりから出て来てね、あ
あ氣分がわるいって、窓の方向いてぼんやりしてたかと思うとよろよろつとして倒れそ
んなつたんでネ、この床で頭をうつちや一たまりもあるめえつて、仰天してつらまえにか
かつたつて、あなた、こつちはこの体だもの、もろにへたつちやつて……」

沖本は、半分ぐらい説明をきくと、黒く垢のつまつた爪の生えた指で事務的にはる子の
瞼をひっくりかえして見た。

「大したことはあるまい。——もう一人か二人つれて来い、ここへころがしとくわけにも行くまいから」

「沖本さん！ 死んじやうんじやないかしら」

しづ子が泣きそうに云つた。

「——ふ、こんなことで死んだら女なんてものは一生に二十度ぐらい生れかわつて来なくちやなるまい」

「体のせいだねエ」

「沖本さん！」

ミサ子が沖本の後からつよい声を出して呼んだ。

「医者呼んだんですか」

「いいだろう」

「ひどいわ！ だつてあなたに容態なんか判らないじやありませんか。若し、何かあつたらどうするんです」

沖本はミサ子のいうことになんぞ耳をかさず、小使がやつて来るのを待つて、

「それ」

と、唇の色をなくして倒れているはる子の方を顎で掬つた。××○○会社には、一脚百何十円とかする 鞍皮張なめしがわぱりの安樂椅子が二十脚も並んだ重役会議室があつた。が、設備のある医務室というものはなかつた。

二人の小使にぐつたりとだかれてエレベータの方へ行くはる子のわきについて歩きながら、しづ子が後毛おくれげを頬にこぼして、

「小母さん、すみませんがよく見てやつて下さいね、ほんとに私心配だわ」と云つた。

「ああよござんすヨ」

沖本がその連中について形式だけの応急室につかわれている室の方へ降りて行かず、スツと庶務の方へ曲る後姿を見ると、ミサ子はムラムラとした。

五時になるのを待ちかねてミサ子はこんどは柳を誘い、二階の端はざれにある応急室へ行って見た。

ドアを開けると室の中はもうガラン堂だ。はる子がいたときあげたのだろう。茶色のブラインドが一枚だけ巻き上つているところからだけうす明あかりがさして、むこう側のビルディングの窓が往来をへだてて見えている。毛ピンが一本床に落ちていた。ミサ子はそれを見

ると淋しい気がした。

「大丈夫だつたのかしら」

「……さア……」

洗面所掛の小母さんにきいたら、気がつくと沖本が来て、
「どうだね、そろそろもう帰れるだろう」

と云つたので、はる子はまだふらつくが守衛に自動車をよんでも貰つて独りでかえつたとい
うことだ。

「どこなかしら家つて」

「代々幡よよはただわ」

「——自動車代、会社で出すのかしら」

柳は、

「出すものか！」

と云つたぎり黙り込んだ。

二三日経つた。けれども、はる子は出勤して来ない。

やがてはる子を知っている××○○会社の女事務員の間に、はる子さん大分悪いらしい話だわという噂がひろまつた。

洗面所の鏡に向つて髪を直しながら、

「はる子さんの、その肺リンパって、肺病なのかしら」

と、瘠ぎすの依田とよ子が云つた。わきで、ザア、ザア水を出して手を洗つていた柳が、「肺病つて——結核じやないのヨ。でもあたし達の職業病だわ。邦文タイプを永くやつてると、力を入れる工合でみんなそうなるのよ」

「たまんないわねエ」

はる子は××○○会社の女事務員の中では古株で六七年勤めみんなから信用されていたのだ。

「はる子さんぐらいになつたら、病気手当ぐらい貰えたつていいわね」

「そんなもん、会社が出すもんですか」

依田とよ子がいつもにくづりした口調でミサ子に云つた。

「私が入社するとき、人事課の細谷が真先に『あなたの御両親は御健在ですか』つてきいたことよ。父はいませんて云つたら、何病で死なれましたかだつて。……私が病気んでもなれば、そりや遺伝だつて片づけられちゃうにきまつてるわ」

「——何だつたの？　お父さん」

クリーム色の帯あげをしめなおしながら、サワ子が子供っぽく訊いた。

「船長だつたのよ。南洋航路で船が沈没しちまつたんです」

「アラ……。じやそんなものの遺伝しやしないじやないの」

「きまつてるわ。だけどね、そんなことだつて会社は口実にしようと思えばするつてことなのよ」

洗面所の窓から、宏壮な××○○会社の建物の間にはさまれたコンクリートの内庭が見下せた。一台の真新しい赤塗りの重油運搬用トラックが真昼の日を浴びそこに来て止つている。無帽子の社員が三人ポケットへ手を突つこんで、一人の男が何か説明しているのを聞いている。

和田れい子が、窓から首をひっこめながら、

「はる子さん、ほんとうに氣の毒ね。私女としてつくづく同情しちゃうワ。あのひと、と

ても無理してたからとうとうこんなことになつちやつたのよ」

「——旦那さんがあるんでしよう？」

「あるんだけど、今ルンペんなのよ。それが会社へしれるとまたうるさいし……それにね、

はる子さんおなかがあやしくなつてたのよ」

洗面所にいた女事務員たちみんなが、れい子のこの話へ注意をひきつけられた。

「そうだつたの！」

「まあ……しらなかつたわ」

「でもね、旦那さんがそんなだし、会社じゃたださえ結婚してる女をよろこばないでしょ？ 帰りをいそいだり、欠勤が多いって云つたり。——はる子さんが今身持んなつて、それでクビんでもなつたらとても暮しちゃいけないことになるもんだから、あのひと、煩悶してたわ。そりや……」

れい子は言葉を途切らしたがちよつと声をひくめて、

「……このごろ、いろんなことがあるようでもまだナカナカなのね。内緒だけれど、はる子さん、しくじつたのよ。それでずつと工合がわるかつたんですよ」

サワ子が、明るい圧えつけられたような空気の中でそつと溜息をついた。柳が沈黙をや

ぶつた。

「医者にかかつたんでしょう？」でも」

「一十五円もとられたんですつて……出血がとまらなかつたのよ」

ミサ子は堪らない心持になつて云つた。

「実際ひどいもんだわ。働くときには結婚していることなんか無視して働くとして、いざ倒れたとなるとみんなおつかぶせちまうんだから」

れい子が、不安そうに片頬笑いをうかべて、

「私なんか、あやういもんだワ」

と云つたが、誰もそれを笑えなかつた。

「だってあなたんところ勤めてるんでしょ」

「そりやそうだけれど、いつどんなことになるかしれないじやないの。……人間の体だも

の」

「ねエ、バカにしてるわねえ」

サワ子が熱心に云つた。

「何ぞつて云うと女らしくしろ！ 女らしくしろって会社じや云うくせしてねえ！」

この頃の不景氣に付れて、会社ばかりでなくいろんな工場でも、男より賃銀のやすい女をドンドン使うようになつて來た。しかも家持ちの、年数の古い女は、能率があがらないと云つてクビにする。その代りに小学を出たばかりぐらいの若い娘を、モットやすい賃銀で雇つて仕込む。

「私んとこの下の小母さんの親類でも、そういうわけで二人もクビんなつたわ、ついこの頃」

柳の話をみんな黙つてきいていたが、れい子がしんみりと云つた。

「——大きなビルディングの中にいるというだけで、私たちだつて女工さんだつて違ひりやしないのねえ。知識労働だなんていい気になつてるだけ滑稽みたいなもんだわ」

ミサ子は××○○会社の女事務員たちの心持が一部ではあるがこんなに揃つてズーツと引緊つたのははじめてだと思つた。

ぞろぞろ食堂の方へ行くと、地下室の階段を下から食事をすました益本があがつて来ながら、ミサ子たちの一団を見ると、

「ダメよ！ 今日は！」

と大きな声で云つた。

「ゴボーに竹輪ブよ」

「どうする？」

「どうする？」

地下室の下り口で停滯してしまった。

「……わかれのレストランにしちやおうカ」

「ね！」

××○○会社の食堂は一回二十銭ずつの食券だった。ところが賄は請負で、二十銭が勿体ないようなお菜のかずのときがあつた。女事務員たちは、そんなとき食券はとつといて「モーリ」で十銭の昼食をする。

九

ミサ子が帰ろうとしているところへ、柳がれい子とつれ立つてやつて來た。

「いつしょに行かない？」

三人は連れだつて、中央郵便局の建物の裏を銀座に向つて歩いてつた。

不図思いついたように柳が、

「ねえ、あなたがたどう思う？ 私、若しはる子さんがこれつきり退社するようなことになつたら、ひとつみんなから慰問金をあつめてはる子さんにあげたらどうかと思うんだけど……」

「そう出来たら、よろこぶわ、キット」

れい子がすぐ答えた。

「私たち、沖本に腹をたてたりはよくやつてるけれど、これぞといつてみんなで纏まつたことってのは一つもやつていなかから、慰問金をあつめるのなんかいいわね」

ミサ子は、黙つてれい子のわきについて歩いていたが内心意外な気がした。れい子は××○○会社の女事務員の中では至つて地味で特色のない方だつた。こんなきつぱりしたこと云うとは考えていなかつたのだ。

柳はミサ子の顔をのぞき込むようにして、
「あなたも賛成？」
ときいた。

「私もいいと思うわ」

「はる子さんが、その後どんな様子か……今日とてもみんな本気になつてたわね、あの調子をくずさないようにしなくちや駄目ね。退社とわかつたら、すぐやりましようよ、ね。

お金をあつめる責任者を誰か三四人きめて……ね」

「ミサ子さん、ひと肌おぬぎなさいよ」

とれい子が笑つた。

「あら……私なんか」

「御謙遜はいりません。……男の社員からだつて、あつめられるだけあつめましようよ。はる子さんは新米の社員が書式を間違えた原稿をよこしたつて、ちゃんと直して打つてやるぐらいだつたんだもの、まさか知らん顔しやしないわ」

有楽町で別れるとき柳はミサ子に、

「じやいいわね、のこと忘れないでいて下さいね」

と念を押した。

落付いているのと、技術がいいのと、どこか人をひきつけるところがあるので、ミサ子は××○○会社へ入つた間もなくから、柳と親しくなつた。

どつちかと云えば人目をひき易い美しい顔だちだが、柳は大して身装を飾らなかつた。

大抵白絹のブラウスにスカートといういでたちで、それがまたよく似合っていた。

××○○会社の女事務員の間に雑誌購読会をこしらえたり、四十分ピクニックをはじめたりして、ミサ子は、初めはただ人望のあるやりてだと柳を解釈していた。

この頃になつて、ミサ子自身の考え方たが少しずつかわつて来るにつれ、柳に対する解釈もかわつて来た。柳が辛抱づよくミサ子たち××○○会社の女事務員にいろいろ思いつきを実行してゆくところには、ミサ子が感服する根気よさがあつた。そして、一つのことによく考えて見ると、決して偶然の思いつきで、バッタリ途切れてしまうという風なやりかたはされていない。エスペラント講習会へ通つてることを、ミサ子は柳にだけ打ちあけた。

はる子の慰問金をあつめる計画が自分にうちあけられたことを、ミサ子はうれしく思い、責任を感じた。

四五日後、食堂ではる子の話が出たとき、とよ子が急に声をひそめて、「ちよつと！ もうはる子さんの代りの人があるんですって！」

と一緒に報告した。

「どうして？」

みんな意外な顔を見合させた。柳が、

「きのうだか、一ヶ月は休職のまんまとしくつて話だつたじやないの？」

「そうなのよ、でもそれは表むきでね、はる子さんのとこへ手紙か何か会社から行つたらしいわ」

とよ子の話によると、はる子の病気は邦文タイプを打つ以上一旦なおつてもまたすぐわるくなるから、この際、もつと健康に適した職業にかわることを会社から勧告して來たというのだ。

十

××○○会社では食堂が地下室と二階と、ふたところに分れてあつた。

二階の食堂の方は日に一円の賄をたべる連中ので、地下室は、ミサ子たちのような女事務員や給仕をはじめ、月給百五六十円までぐらいの社員達のためだ。上と下とでは階級がはつきり分れ、身なりも違つた。上の食堂なんか見たことのないものが、地下室の細長いテーブルに向つて、せかせか朝飯ぬきの昼をたべた。

その地下室の食堂の白い壁に、食物のカロリーを表に書いた厚紙が貼つてあつた。大体、幸楽軒の請負經營にはこれまでみんな不満で、不平が絶えない。カロリー表が貼り出された当時、男の社員たちは、片手をポケットへ突こんでその表を見上げながら、「オイ、冗談じやないぜ！ これから鰯にしんと大豆ばつかり食わされるんじやないか。科学もこうなつちや侘しいね」と云つた。

「――――――――――――――――――――」

「知識労働者の一日所要カロリーは二千三百です」

「――――――――――――――――――――」

表のわきにこう書いてある。誰もそれを見ていい心持はしなかつた。それだけ食えたら黙つていろ、というような押しつけがましい感じなのだ。

近頃、その地下室の食事がわるい続きだ。こないだはる子が悪いという噂があつた頃から、ミサ子たち一団の女事務員連中が「モーリ」へ出かけるのは、今日では五遍目になる。

「ね、ちょっと！ 馬鹿にしてるわね、蒟蒻こんにゃくと人参のお煮つけが、何千カロリーある。

つてんでしょう！」

しづ子が、「モーリ」の小さい丸い腰かけの上で窮屈そうに袂をかき合わせながら小声で腹立たしそうに云つた。

「……でも狡いわ。見てて御覽なさい、あのカロリー表にはつきり書いてない材料ばつかりつかつていてるから」

れい子が、穏やかな、けれども飾りけない口調で、

「大抵のとき、マアあの調子じや八百から九百カロリーがせいぜいね」と云つた。

「私たちの二十銭から毎日何百カロリーかずつ儲けさせているんだから大きいもんだ」

支那そばを食べ初めながら柳が、

「ねえ、どう思う？ 私、食堂の問題はみんなでもう少し真剣に考えなくちやならないと思うわ。わたし達家で御馳走をいくらでもたべて補充の出来る身分じやないもの。謂わばお昼が一等主な食事なんだもの。あんなもの食べさせられて、栄養不良で病気になればすぐクビじや、余り話にならないじやないの」

「全くだわねえ！」

しづ子が賛成した。ミサ子は柳の言葉やそれに反応するみんなの氣分を、我知らずこま

かく注意した。はる子の事件は女事務員の大多数に、××○○会社に対する一つの共通な不満感を与えていた。食堂の不平だつて、それと心持のどつかでは絡んでいるのだ。

ミサ子は、笑いながら、

「どう？ 賄征伐やつちや！」

と云つて、四五人の顔を見渡した。

「あら、いやだ……」

れい子がそれを、おさえて眞面目に云つた。

「考へると、でも変だわよ。同じものを給仕さんたちは十銭でたべてるんでしょう？ 月給百五六十円の人たちだつて二十銭とすれば一番割のわるいのはわれわれ階級じやないの。われわれ女連が一番しぼられてることになるのよ！」

「だつて、まさか私達が食べもののことからストライキも出来ないじやないの、みつともなくて……」

ぬるい茶番をのみかけていたミサ子がそれを置いて熱っぽい調子で云つた。

「私達がそういう心持をすてない限り、むこうじやそれを利用してつけ込んで来ると思うわ」

「——そりや確にそうね、——でも……」

しづ子、依田そういう割合元気な連中もこれに対しては黙りこんでいる。——

そのまんま「モーリ」を出て、みんなはぶらぶら東京駅の方へ歩いて行つた。

デパートの送迎自動車だまりの広場で白いテントが陽に光つて、人の列が見えている。黄色い葉をのこした細い銀杏の若樹のまわりや、暖められたガソリンの軽い都会らしい匂いの中を絶間ない自動車の往来を縫つてはあつちこつちのビルディングから出て来た連中が素頭で散歩している。

この大勢の、大して愉快な希望もなさうにして歩いている殆どみんなが月賦の洋服を着、女房子供をかかえて去年から賞与も半減かまるで無しかで日々同じように働かされているのだと思うと、ミサ子は心の底でおつかないように感じた。

実際丸の内の氣分も、この二三年に変つた。ミサ子が女学校時分ここを通る毎に感じたような、自信ありげな、燐々光るような雰囲気は、この頃の丸の内のどこの隅にもない。ぶらぶらと歩いている連中も気むずかしげに巨大なビルディングの下で、小さくごみっぽく見える。

東京駅の正面車寄のわきの楓の植込みの前で三四人もう頭の薄くなつた連中が日に向つ

て並んで、ニヤニヤしながら仲間におとなしく素人写真を撮られていた。

十一

そろそろ時間になるので、ミサ子が衝立ついたてのかげで仕事着のスナップをかけているところへ、

「ちよいと」

廊下かられい子が手招きをした。

「なアに？」

「化粧室へいらっしゃいよ、はる子さんから手紙が来たんですよ」

思わず足を早めて行つて見ると、廊下からは見えない一方の隅の鏡の前へ、柳をはじめしづ子、サワ子そのほか二三人がかたまつて凝つとしている。

れい子が眞面目な小声で、

「大井田さん来てよ、見せたげて下さい」

と云つた。黙つてしまふ子が手にもつっていた藤色のレターペーパーをミサ子の方へ出した。

鷺堂流にくずした細いペン字が紙を埋めている。ミサ子は、書き出しのありふれた時候の挨拶のところはいい加減にしておいて、「私の今度の病氣につきましては、本当にみなさまの心からの御親切なお慰めの言葉をいただきまして」というところから先を、気をつけて読んだ。はる子は持ち前の地味な氣質から、自分の心持は表面に出さないよう努めているのが文章の調子でよくわかつた。それでも、この手紙を××○○会社の同僚一同へあてて書く気にまでなつた圧えきれない熱いものが、切ないほど細い女らしい字のかげに溢れている。

「一昨日会社から使で解雇通知と金一封をいただきました。あけて見ましたら、百五十円も入つておりました。ふつつか不束ながら私が七年間こんな体になるまで会社につくした労力は、百五十円のねうちでございましたのね。ホホホホ……」

ミサ子は、この文句を繰返し読んでいるうちに頬っぺたの下の方が鳥肌だつて来るような強い感じにうたれた。

みんな体を大切にして元氣で暮すように。そこで働いていた間、みなさんが自分に優しくしてくれたのを忘られず、挨拶を書く。万一気がむいたら遊びに来てくれ。そういう言葉の終りに、さりげなく「私の病氣も伝染性ではないそうで、そればかりはせめても思

つております」といかにもはる子らしくつけ加えてある。――

ミサ子は、しづ子に手紙を返しながら、

「慰問金のこと、どうなつて?」

と、柳の顔を見た。

「私今からすぐいくらかでもみんなの力でしてあげたいと思うわ」

「賛成だワ。はる子さんの口惜しい心持は私にだつて実によく分るんですもの!」

食堂の不平を話したときには体裁がわるいと尻込みしていたサワ子も、はる子の手紙に動かされ、熱心に相槌を打つた。

「――惜しいことにもうゆつくり相談してる時間がないわね、……で、どうしてやる? 誰か係りをすぐ決めようじゃないの?」

柳の言葉をひつたくるようにれい子が、

「雑誌購読会の名でしましようよ」

と提案した。

「個人個人の名を出すと穴銭がまたうるさいから……」

「何か勧誘状みたいなものがいりやしない?」

しづ子が訊いた。

「あつた方がいい。誰が書く？」

「——柳さんお書きなさいよ！」

例の落付いた口調で柳が云つた。

「じゃ、私退社までに下書こしらえておくわ。それをみんなで相談して清書しましようよ」

「早い方がいいわ、ね！」

ミサ子が云つた。

「あしたつからすぐやり始めましょうよ」

れい子、サワ子、ミサ子がめいめいうけ持を分担して××○○会社ではる子を幾分なりとも知つていた人々の間に慰問金募集をやることになつた。

昼休みに地下室の食堂で、隅の方の長卓テーブル子にかたまつてゐる給仕連のところへ行つてミサ子とれい子とが云つた。

「はる子さん、クビになつたのよ、いよいよ。あんなにいい人だつたのに病氣してゐし、本当にお氣の毒だから、私たち慰問してあげようと思うの。お出しなさいよ、二銭でも一

錢でもいいわ、気は心だから……」

「——へえ。じゃ僕一枚五錢！」

「おい須田君、電車賃かしてくれるかい？　かす約束してくれたら十錢出すぜ僕」
「いや、これ」

一円二三十錢集つた。だが、男の社員たちのところへ勧誘に行くと、ミサ子は一種の腹立たしさを感じた。多くの者ははる子の首切りにも慰問金募集にも極めて冷淡だ。ミサ子がさし出す勧誘状を手にも取らず、椅子へ腰をすりこましてかけたまま読んで、大町という社員は、

「ふーむ、こりや誰が書いたんだい？　なかなか文章家じゃないか。ちよいとほろりとさせる効果があるぜ。さすが女だね」

と云つた。

「どれ、どれ」

眼をせばめてわざとらしく煙草の煙をさけながら、別の人気が、

「——佐田つて……この女亭主持だろう？」

「なんだカンパがはじまつたもんだな。じゃバット一箱分喜捨するよ。その代りよく僕の

名をつけといてくれね。僕がクビんなつたら大いに小野救済カンパを起してもらうから……」

大体女事務員たちのやることだ、と下目に見た態度がみんなにある。ワイシャツのカフスを引こめながら軽蔑した口つきで、

「僕は知らんね。会社の責任だろう。こんなことは——」

と云う者もある。社員の間で言葉数は多いが金の方は思つたより集まらない。

顔を合わせると、ミサ子もれい子も、

「男のひと達、始めつから出す気がないんだもの」

と、感想は一つだった。

「五十銭や一円、カフェーへ一足よつたと思えば何でもないのにねえ」

女事務員連ではる子の事件をよく知つているものは眞実わが身にひき添えた同情を示した。

「私ほんとはもつともつとしたいんですけど、実は去年からストップなのよ。あしからずね」

そう云えばミサ子や柳にしろ、一昨年頃から月給はちつとも上らないまだ。

「私、はる子さんてひと、よく知らないんだけど……」

と、まわりの振り合いを女らしく考え、それだけで出すものもある。

然し、どつちにしろ、××○○会社の内部ではあつちこつち働いている課の違う女事務員達の間に、廻状をまわすだけが、一仕事だつた。

執務時間中、女事務員が公務のほか他の課へ行くことはやかましく禁じている。けれども、確実に対手をつらまえようとすれば執務時間を狙うしかない。

ミサ子は、他課へ廻す書類を打ちあげると、さり気なく検閲をさせて自分のところへ持ちかえつた。暫くしてから、ああ、とびつくり思いついたようにその書類を握つて素早く室を出た。本来こういう仕事は給仕の役なのだ。藤色のミサ子の事務服のポケットには「佐田はる子さんのために」と書いた廻状が入つている。――

十二

はる子の代りだと云つて新しく入社した太田千鶴子が、女事務員たちの間に不人気だ。
「今度入つたひと、凄いわね」

という第一日の印象が、だんだん、

「ちよいと私どもとはお人柄がちがうのね」

という風に濃くなつて行つた。

千鶴子の方でもまたそういう素振りを憚らず見せた。例えば会社へ出勤して来る服装にしろ、みんなは銘仙程度だのに、千鶴子の羽織はいつも縮緬だ。フェルト草履にしろ、ハンド・バッグにしろ、自分たちが僅の月給から工面して買うものとは格が違うことをみな敏感に見てとつた。ところが、三日ばかりすると益本が、

「ちよいと、ニュースよ。今度來た太田さんて太田淳三の姪なんですって！」
と、眼を大きくして報告した。

「重役の？」

「そうなのよ」

「どうりで、われわれとは違うわけだわね」

サワ子が苦笑いを泛べた自分の顔を鏡にうつしながら、どこか自棄つけやけっぽい口調で云つた。
「それでね、こここの月給なんかほんのお小遣いなんですってさ」

「ふーん」

××○○会社では、女事務員を箇人紹介でだけ雇うのだが、そのとき紹介者が会社の担当どころの者であるとないとでは、入社してからの待遇がちがつた。重役の縁辺の者だと、入社当時の月給は同じだが、一年ずつの定期昇給の率や賞与の率がずっと高いのであつた。

「——私だつてこれで憚りながら入るときは、重役の紹介よ」

「——いい子が手を洗いながら云つた。

「へえ……そうなの！ 誰？」

「外田権次郎」

「人事課のひとつたら、外田さんの何にお当たりですかつて、そりやしつこく訊いたわよ」

「姪ですつて云えばいいのに！」

柳の言葉にみんなが笑い出した。

「何でもないんですつて云つても、どうかありのままおっしゃつて下さいだつて！」

「卑怯だわよ。大体会社のやりかたつたら！」

サワ子が瘤のたつた声で云つた。

太田千鶴子に対する漠然とした共通な反感が微妙に働いてもとからいた××○○会社の女事務員たちの心持を一つにまとめるきっかけとなつてゐるのがミサ子にさえ、はつきり

感じられた。はる子の慰問金あつめの仕事が、太田の来てからの方がやり易くなつたのもそれは分る。――

間もない或る日曜日、ミサ子は下宿の水口の外へ盥たらいをもち出し、勢よく肌襦袢の洗濯をやつていた。

一週間朝から夕方まで丸の内のオフィス・ビルディングの中で、コンクリート床を擦る靴音、壁に反響するタイプライタアの響にのまれて暮していると、塵の少ない休日は閑散な空気の工合まで肌ざわりが違うように感じられる。

水口のわきにあらい竹垣があつて、そこに山吹の幹が荒ツぼく繩でくくられている。ざぶ、ざぶ濯いではその水をミサ子は山吹の根元の小溝へあける。

牛込の姉の暮しが心に浮んだ。同居の話を断つたのは、氣の毒のようだがよかつたと思つた。

ミサ子も姉の文子も同じ生れではあるが、こういう激しい世の中にあって、生きる態度は別々であつた。ミサ子にはこの頃自分たち小ブルジョアの女の生きかたというものが、やつと腹にはいつて來た。××〇〇会社の女事務員という現在の社会での自分の身分と、自分たち働いて食つて行かなければならない女として一人一人が胸にもつてゐる不平不満、

希望とをつき合わして見れば、実質のない澄しかたなどしておれない。自分がつまりプロレタリアの一人の女だということがだんだんはつきり分つてミサ子はこの頃腰のすわった、闘いの対手がわかつた確かりした心になつてゐるのであつた。

洗濯物を洗面器へ入れてもつて上り二階の自分の窓前の細い竹竿にかけていると、下で、「今日は……」

という声がする。小母さんがいないと見えまた、

「——こんにちは……」

ミサ子は、いそいで玄関へ下りて行つた。

「いたのね、よかつた！」

格子の外に柳と思いがけない坂田どが顔を並べて立つてゐる。赤と藍の細かい縞の割烹前掛姿のミサ子は、

「まあ……」

栓をとつて格子を開けた。

「どつかへ出かける？」

「いいえ！ さ、上つて下さい」

柳はちよいちよい遊びに来たが、坂田は初めてだ。二階へあがると帽子を畳へ放り出しておいて窓の前に立ち、外の景色を眺めた。

「なかなかいいじやないですか」

「ホラ、そこに、むこうの屋根から見えるの落葉松よ」

柳が、わきに立つて指さして説明してやつてゐる。戸棚から坐布団を出しているミサ子に、

「あの鸚鵡おうむまだいるの？」

「いるわ」

「何です？」

「あの家に変な鸚鵡がいて、イヤー、イヤーつて鳴くんだつて」

林檎を柳がもつて來た。それをむいて食べながら会社のこと、はる子の慰問金のこと、エスペラント講習会のことなど三人は話した。

「——内務省なんかでも、この頃は実は実にうまくクビにしますよ。もとみみたいに一どきにドツとは決してやらないんです。いつの間にかいない。おやと氣がついたときはもう夙とうに引導をわたされている。——手が出ないですね」

「ああね、ミサ子さん、あなたこの頃やつぱりちょいちょい左翼劇場見に行くこと？」

柳がスカートの膝をくずして坐り、蕎麦^{そば}ボールをつまみながらきいた。

「大抵行くわ」

「私ね、昨日^{ゆうべ}行つて来たんだけれどね……あなたどう思う？ 私せつかく観るのにで
んばらばら一人一人見てそれつきりにしておくの惜しいと思うんです。きっと会社にも芝
居^{すき}はいるんだから、誘^{さな}いあつて観て、あと座談会でもしたら、さぞ愉快だと思うんだ
けれど……」

「——ほんとに！……」

ミサ子は、微かに顔を赧^{あか}らめながら、

「私、生意氣みたいだけど、実はそんなようなことも考えてはいたのよ、こないだつから。
……私達、全く会社の中では切り離されていて仕様がないから、せめてそんなことででも
集まれたらどんなにいいでしよう」

柳は考えぶかい黒眼が一層黒く輝くような表情で、

「はる子さんのお金集めはいつ頃すむかしら」と独^{ひとりごと}言のように云つた。

「さあ……もう一週間ぐらいのうちににはすむわね」

「沖本の穴銭がぶつぶつ云い始めたらしいのよ、少しぐらいまわり切らなくとも、崩されないうちにそつちは一応切りあげて、これを手がかりに演劇サークルみたいなものをこしらえたらどうかと思うんだけど」

「いいわ！ 会社であれだけにみんなの気が揃つたことってはじめてなんだから、これつきりにするのは何だか本当に惜しいわ」

柳が坂田に向つて、

「××○○会社の女事務員はお上品だから、どんなに食堂がひどくても、食べ物のことから騒ぐなんてことは出来ないんですよ」

と鷹揚に笑つた。坂田は、

「ふむ」と云つたぎり、別に皮肉な顔もせず、また笑いもしない。

ふだん何だか落着ないサラリーマンばかり見ているミサ子には坂田のその様子が好意をよび起した。柳たちはざつと二時間ばかりいて帰りかけた。が梯子はしごの下り口で、

「ちよつと」

柳が後からついて来るミサ子の体をかるく押し戻して、小さい封筒に入れたものを握ら

した。

「これ読んで——あと焼いちまつて！ いい？」

ミサ子は合点した。そして渡されたものを内懷へ深くさし入れ、すぐ柳の後につづいて降りて行つた。

十三

焜炉こんろを座敷の真中へ持ち出し、ミサ子はその中で柳がおいて行つたものを焼いている。割烹前掛をかけた両膝を焜炉のふちへ押しつけるように蹲んで、ミサ子はだんだん燃える紙に目を据えている。左手の先を割烹前掛の袖口の中へひつこめ口元を抑えている。さつきまで柳や坂田の喋つていた窓の障子は今もあいたままで、そこから風のない日に照る櫻の木の梢が屋根越しに東京の郊外らしく眺められる。煙を出さず、明るい午後の森閑とした座敷の中で、明るい焰を立てて紙が燃えて行く。

ミサ子は何とその心持を表していいかわからず、凝つと袖で口元を抑えているのだ。これまでにしろ、小説で読んだり、新聞で読んだりして、種々の経営の中に強い、闘争的な

左翼の組合のあることは知っていた。だが、柳から渡された全協一般使用人組合のニュースは、ミサ子に、漠然と頭で考えていたのとはまるで違う感動を与えた。組織は思いもかけないところまでひろがつてゐる。「三字伏字」の内部からさえニュースが出てゐる。――

宏だなビルディングの聳え立つ丸の内一帯の風景が、からくりをわって、現実の底から初めてミサ子の前に立ち現れた。最後には必ず大衆によつて征服されるべきものとしてそれは示されているのだ。

ミサ子もこの頃は、現在の社会で多くの者を不幸にしているのが一人二人の人間の力、まして××〇〇会社の穴銭沖本などとは思つていなかつた。この資本主義の世の中そのものが組立て直されなければならない。だからこそ、××〇〇会社の内でもミサ子は知らず知らず女事務員たちの間にあつて、柳などの助手のような立場に立ち、みんなの不平をあつめたり、一致した行動へみんなを召集したりする仕事に加わるようになつたのであつた。

柳が恐らく分会員であろうということは、ミサ子をちつとも驚かせなかつた。何か当然だという落付いた心持さえした。自分がこんなに闘争の組織に近くいるのだという新しい

自覚。自分でその組織に吸いよせられるであろう程、この日本の中に大衆の力はもり上つてゐるのだという生々しい実感が、ミサ子を腹の底から搖るのであつた。

焜炉の中ですっかり燃えきつた紙が黒いカサカサした屑になつてしまふまでミサ子は身じろぎもしないで見届けた。それから四辺に飛ばさないように焼屑を焜炉の下へおとし、それを片づけた後の座敷を掃き出した。思い込んで下を向いたまま丁寧にゆっくり箒をつかいながら、ミサ子はこういう一つ一つのことを自分が何とも云えぬ深い愛と注意とでやつてゐるのに愕いた。^{おどろ} こういう文書を始末する心持は独特であつた。跡かたもなく焼き、掃き出しながら、しかも逆に焼きすぎてたものの内容が一層身につくというような切実な感じなのだ。

翌朝、ミサ子はこれまでにない希望と觀察に満ちた氣持で丸ビル前の広場に溢れる勤人、女事務員の群衆をながめた。

××○○会社の通用門に入ろうとするところへ、ちょうど向うから柳がやつて来る。ミサ子は思わず包みを持ちかえながら待ち合わした。

「お早う……」

「お早う……ひとり？」

柳はきのうのことは何にも云わず、ざくあたりまえに、
「おひるにまた誘つてね」
と云つた。

十四

三十三円六十八銭也。それだけが××○○会社の中で、はる子の慰問金としてあつまつた。一番親しく行き来しているしづ子がそれをはる子の家へ届ける役に当つた。

二日ばかりしてはる子から心のこもつた礼状が慰問金を出した女事務員一同宛に来た。例の洗面所でその手紙をとりついだしづ子が、

「……これ……お金出してくれた人たちに一わたり見せなきやいけないわねえ」と柳に相談をもちかけた。

「そりやそうね」

「こうしちゃどうでしよう」

わきかられい子が云つた。

「私達がこんなことしているの、どうせ社内の人たちには知れていんだし、きっと沖本にだつて分つてるとと思うわ。お金出してくれた人たちは、どつちみち大抵二十銭階級なんだからいつそおひるに食堂へはる子さんからの手紙を貼り出しちやつたらどうかしら——」ミサ子は、緊張した期待で柳の返事をまつた。これまで××○○会社の食堂にそんな社員から社員への呼びかけが貼られたことなんぞ一遍もなかつたことだ。

「……どう思う？　みんな」

れい子は熱心に、

「庶務の連中をだんだんこういうことに慣らして何も云わせないようにするにもつて来いだとと思うんだけれど……」

と云つた。

「——どうかしら……」

しづ子が、はる子からの手紙を改めてひろげながら、

「でもね、これには一人一人お金出した人の名が並んでるのよ、はる子さんは律氣だもんだから……」

「やっぱり、先^{せん}のようにしてこれは廻しましょうよ」

柳が決定的に云つた。

「せっかくお金出したのに、あとあとまで睨まれたり、迷惑がつたりする人があつちやいけないもの……、今日しづ子さん、あなたの部だけまわしてしまえない？」

「さあ、やつて見るわ」

「あしたは、れい子さんの方へまわしましょうよ、ね？」

そして、柳は、

「そのとき、ちょっとこれもついでにまわしてよ」

と、窓枠へ紙を押しつけて、手早く一枚の短いノートを書いた。

「なんなの？」

書いている肩越しに覗き込みながらい子が、

「あら、本当？」

と嬉しそうな声を出した。

「私早速申込もうつ、と！」

「なに、なに」

「この次の左翼劇場へ団体で見物に行けるんですってさ」

「へえ……」

しづ子は、左翼劇場のことなどはよく知らないらしい。ほんやり、柳からノートをうけとつた。

「まとめて切符とると、やすくなるのよ。あなたの方で何枚いるか、はる子さんの手紙といつしょに希望者を集めて下さいね」

ミサ子は、左翼劇場へゆくときなんかはよく連立つて出かける××商事の順子のことを見い出した。

「ね、それには、よそのひと誘つちゃいけないかしら」

と柳にきいた。

「よそのひとつて……」

「私、××商事に友達がいるのよ。よく一緒に築地へなんか行つてるんだけど、そんなひとまで入れちゃいけないものかしら……」

「いいわ！」

柳が、下膨れのゆつたりした頬をぽーと赧らめながら、

「とても歓迎よ！」

と力をこめて答えた。

「そのことも書いとこう！　ね？　れい子さん、この近所に勤めているお友達は誘つてい
いのよ」

柳は、しづ子からノートをとり戻してその注意を書き添えた。

「へ、じやすみませんがこれをどうぞ」

はる子の慰問金を集めた経験から、××○○会社の女事務員たちはみんな廻状をまわし
たりすることに大分馴れた。執務時間中、よその課のしづ子が入つて来てちよつと話して
出て行つた後、男の社員が、

「おい、何をこそそやつてたんだい？」

などと云つても、サワ子まで、

「楽しい相談！」

と笑いまぎらすようなゆとりが出て來た。ミサ子はその日のひけ際、いそいで順子のところへよつて話をまとめた。おとなしい順子は、

「あなた達の方、この頃何だか面白そうでいいわねえ、こつち平凡よ」

と羨しそうに、毒のない好奇心を示して云つた。

「そつちはそつちであなたでも先に立つてやればいいのに」
「駄目よ。……まあお仲間に入れといてよ、当分。……その内には何とかなるかもしけな
いから」

もつと外に左翼劇場見物に誘う相手はないかと考えるうちに、ミサ子は三輪みどりを思
い出した。元柳原の三角みたいなみどりの室というのへも、つい暇がなくてまだ行かなか
つた。エスペラント講習会へも近頃みどりは初めの頃ほどきちんと出て来ない。――

ちょうど退け時間が迫つてシトシト薄ら寒い小雨が降り出した夕暮のことだ。ミサ子は
傘なしで、車蓋の濡れ光るタクシーの流れを突切り、丸ビルへかけ込んだ。みどりの勤め
先の堂本兄弟商会というのを一階の案内書で調べると、五階にある。エレベーターを出
てから右へ行くところを左からまわつたのでミサ子はあらかた事務所は退けた後の廊下を
いい加減歩いた。湯呑所で、小使が荒っぽく後片づけをしている。わきに金文字で堂本兄
弟商会と書いたドアがしまつている。

ミサ子はハンドルに手をかけてまわして見た。^あ明かない。二三度まわして見た。それで
も開かない。隣室のドアが半開きになつて、そこには床を掃いている給仕の姿が見えるが、

それはもうよそだ。ミサ子は湯呑所のところへ行つて、

「堂本の事務所ではもうみんなひけたんでしょうか」

と小使いに訊いて見た。ガス焜炉を動かして台を拭きながら、

「まだでしょう」

「しまつているんですけど——」

「へえ……つい今しがたまでいたんだが……じやかえつたかな」

大してとり合う氣勢もない。ミサ子はドアの前まで戻つて行き、向い側の壁にもたれて風呂敷包みをときかけた。みどりが明日の朝来て見るよう、書き置きをして行こうと思つたのだ。ミサ子が小さいはぎとり帳をひき出したとき、今まで薄暗かつた堂本兄弟商会のドアの内部にパツと電燈がついた。おや、と目をあげた拍子に再び電燈は消えてしまつた。何かの間違いだつたのだろう。ちょっと様子を見た後ミサ子が再び手帳へ目を落そうとすると、今度は明らかに誰かの仕業らしく、パツ、パツ、と二三度電燈が明滅し、ひどい勢でドアの錠があく音がしたかと思うと、派手な袂で風を切つて内から飛び出して来た若い女がある。ミサ子の方がぎよつとした。みどりであつた。

みどりは立つてゐるミサ子をすぐ認めた。が、まるで今ミサ子がそこにそうやつてゐる

ことは約束してでもあつたように、何とも云わず上気した顔のまんまざんざん洗面所の方へ歩き出した。みどりのとび出したドアの内では、男が無遠慮に痰をはいている音がする。ミサ子は何だかそこにそのまま立つていられない気持になつて、洗面所へ行つた。みどりが水道の栓をひねりっぱなしにして顔を洗つている。掌に掬つた水で邪慳に自分の唇を洗つて、ハンケチで拭いて、声に出して云つた。

「チエツ！ 畜生！」

ミサ子が入つて行くと、直ぐ、

「よつぽど前に来た？」

と訊いた。

「……いないのかと思つたわ」

「ふむ」

みどりは、こわい、怒った眼つきのまま今は髪をときつけている。ミサ子には前後の事情が分るまいとしても分る。みどりは、凝つと鏡の面に目を据えて断髪を梳いていたが、急にミサ子の方を向いて、

「どう？」

と云つた。

「私たちは、こういう目にも会うのよ」

そして、自嘲するように笑おうとしたがみどりの唇が震えて、見る見る目に涙が湧き出して來た。頬つぺたを涙の粒がころがり落ちた。それを荒々しく手の甲で拭いて、みどりは鼻の頭をコンパクトでたたき始めた。

わきに立つて、その様子を見ているミサ子はみどりの気持が一々わかる。

「——出ちまいなさいよ！」

ミサ子は思わず親身な声を出して云つた。

「出されちまうわ、どうせ。堂本の奴つたら……畜生！　ひとを……旗日だつてつたら、証拠を見せろだつて手なんぞ出しやがつて……チエツ！」

帯までしめ直すと、みどりがやや氣の鎮まつた調子で、

「何か用だつたの？」

ときいた。

「あなたもしかしたらこの次の左翼劇場見に行くかしらと思つて——私のところに割引で切符を買うついでがあるから訊きに來たんです」

「まあ——ありがとう。それでわざわざよつてくれたの？」

「近いもん」

「そりやそうだけれど——私、うれしいわ。是非仲間へ入れて下さい！ お金わたしておきましようか？」

「切符とひきかえでいいわ」

「……じゃ、私ハンド・バッグとつて来なけりや……」こいらで待つて下さいな」

「——大丈夫なの？」

「平気さ」

ミサ子が洗面所の前に立つて待つている。みどりは堂本兄弟商会という字が廊下のこつちから見える程ひろくドアを開けっぱなしたまま、事務室内へ姿を消した。

十五

その二十日ほど前から、日本中の新聞が満蒙事変を喧しく報道して、号外の鈴の音がミサ子たちの働いている××○○会社の窓越しにまで聞えた。奉天を占領したとか、独立守

備隊がどこそこへ進軍したとかいう記事が一号活字で新聞に出ても、××○○会社の若い平社員たちは一般に冷淡で、疑わしそうにジロジロひろげた新聞を読みながら、「おい、社はこれでいくらぐらい儲ける魂胆なんだろうな」

などと云つた。

「俺たちに何のかかわりあらんや！　だ」

「〔六十二字伏字〕」

「〔六十七字伏字〕」

××○○会社の女事務員たちも、直接この事件については冷やかな態度で、格別みんなの話題にものぼらなかつた。ほんやりとではあるが、「十五字伏字」投資している資本家どもの利益になるばかりだと分つて、新聞の空騒ぎに対し一般的な反感があつた。

昼休みのとき、濠端を四五人でぶらぶら歩いていたら、ちょうど号外売りがやつて来た。腰の鈴を振りながら車道と人道とのすれすれのところを走つて行く後姿を眺めて柳が誰にともなく、

「ブルジョアどもはこすいわねえ」

と云つた。

「早くつから蜻蛉の模様なんか売り出させてさ。——今年は蜻蛉の模様がこう流行るから、きつと戦いくさがある前徴だなんて云いふらさせて……」

ミサ子でさえ、そのときは柳の言葉を大して注意してきてはいなかつた。

この頃になつて××○○会社の女事務員たちの間に不平が出て來た。残務が目立つて殖えて來たのだ。××○○会社は満州に重要な姉妹会社をいくつも持つてゐるし、国内的に見ても、軍事工業関係の製粉、染料、肥料、金属などの工場をいくつか經營していた。戦となればそれが毒ガス、火薬、銃器製造所となる。××○○会社はうんと儲けるわけだが、残務の女事務員は相変らず五時から七時までは二時間を丸ままだで搾られなればならない。

「ねえ、ちよつとやり切れないわね、私これでもうつづけざま三日よ」

益本が食堂で、みんなに聞えるような大きい声で苦情を並べた。

「はる子さんの二の舞なんか、私真平御免だ」

ミサ子にしろ、一週に平均二度ぐらいだつた残務が殆ど一日おきぐらいの割になつて來た。それでいて世間一般を見れば、いろんな工場や役所では依然として首切りがどんどんされている。

左翼劇場団体見物の申込みをあつめたれい子が、「庶務じや一体何を考え出したんだろう」と怪訝^{けげん}そうに呟いた。

「ね、女事務員一同に戸籍謄本を出させるんですってさ……」

「ほんと?」

しづ子が眉をもちあげて訊きかえした。

「ほんとらしいのよ、どうも」

「私困っちゃうな……どうして別な名をつかつてるかなんて変なこと云われやしないから……」

「まさか!」とよ子がうち消した。

「だつてあなた結婚する前に入つてるんだもの」

しづ子は半年ばかり前に結婚した。会社では既婚者を大体歓迎しないもんで、しづ子は旧姓のまま通していたのであつた。特別な事情のない者にとつても、これは何か新しいことのはじまる前ぶれだという不安な予感を与えた。

「おかしいわね、あなた入社のときそんなものとられたこと?」

「いらなかつたわ」

「入つて何年にもなるのに今更どうしようつていうんだろう……」

柳は口々の言葉をききながら自分からは何も云わなかつた。

四五日すると、実際サワ子が沖本によばれて、戸籍謄本を出すようにと云われた。

「いやあね、薄氣味わるいつたらありやしない。沖本つたら、元来履歴書と一緒にどこだつて出させているものだが、これまでみんな紹介だつたから放つておいたんですけど……形式だけのことだよだつて云つていたことよ」

ミサ子は机の前に坐つて小型の日記帳をつけていた。夕飯をすましたばかりで、階下しもで

は煙草専売局へ勤めている亭主がラジオの薩摩琵琶を聞いている。

格子のあく音がして、

「大井田さん、お客様ですよ」

細君が階子口から呼んだ。立つて行く間もなく、

「いい？」

勤めのまんまの装をした柳が登つて來た。

「どうしたの」

「ちょっと」

ミサ子の机のわきに坐るとすぐ柳が、
「あなた今夜ずっといる？」ときいた。

「ええ」

「一人ひとを泊めてやつてくれないかしら」

ミサ子は、

「……布団がないんだけれど」

と困惑そうな顔をした。

「いいのよ、窮屈でもおもやいにして泊めて貰えたらたすかるわ。十八ばかりの娘さんで
すよ……今度だけどうにかなればいいんだから……」

柳は何か頻りに考えていたが、

「その娘さん沢田つて云つて来る筈だから、どうぞよろしく」

半ばふざけてのように軽くお辞儀をした。

「多分九時頃来ますからね、心配はいらないの、寝させてさえやればいいんだから——」

ミサ子にはその娘がどんな仕事をしている人か略見当がつくよう思われた。

「私の友達ということでいいんでしょう?」

「結構だわ、じゃどうぞ」

どこか落つかない気持で待つていると、約束の時間より早めに、銘仙ずくめのおとなしい装の若い女がミサ子を訪ねてやつて来た。

電燈の下で向いあつたが、ミサ子にもその女にも、別に話すことがない。顔を見合わせ、何ということなく微笑みあつた。沢田というその女は、やがて淡白な口調で、

「あしたあなたお早いんですか」と訊いた。

「私、勤めているんです。七時に起きりやいいんだけれど、あなたは?」

「六時前に出かけたいから……そろそろやすみましようか」

「布団がなくてわるいわね」

「私こそ、いきなり御厄介になつてすみません」

沢田はミサ子を手伝つて布団をしくと、行儀よく、だがちつとも遠慮せず帶をといて寝仕度をした。

ミサ子の仕度を待つて、

「あなた、どっち側がいいでしよう」ときいた。

「どっちだつて同じですわ」

「——でも、ふだんの癖がおありでしよう！ 私はほんとに同じことだから……」

そういう心遣いは、ミサ子に飾りない親しさを深く感じさせた。数分前は見も知らなかつた女と寝るような気がせず、ミサ子は快活に、

「じゃ私右側にやらせてもらうわ」

と云つて、自分から先に布団に入つた。

電燈を消すと間もなく、沢田は眠つたらしく、速いかるい寝息をたてはじめた。しんが疲れていると見え時々ぴくり、ぴくりと細そりした体がつれるのが感じられる。ミサ子は相手の眠りを妨げまいと凝つと横をむき、暗闇の中で目をあきながら、自分のとなりで若い体が疲れで痙攣するのを全身で感じていた。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第四巻」新日本出版社

1979（昭和54）年9月20日初版発行
1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第四巻」河出書房

1951（昭和26）年12月発行

初出：「婦人之友」

1932（昭和7）年1～4月号（著者検挙のため未完）

入力：柴田卓治

校正：松永正敏

2002年4月22日作成

2003年6月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) に作られ

ました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

舗道

宮本百合子

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>